

(目黒教授)

この地震は 1923 年、大正 12 年ですね、9 月 1 日だいたい正午、11 時 58 分に起こった M8 クラスの地震で、相模トラフというところの断層が地震を起こしました。

(福田市長)

今 154 万人で 30 倍以上に大きくなりました。かつ人口密度という意味では、政令指定都市、大都市の中で 2 番目に大阪市に次いで高いということなので、非常に狭い地域の中に多くの人々が住んでいるということを考えれば、関東大地震の時の被害は比較にならないほど影響力が大きいというふうに思いますので、どれだけ私たちがこの状態でのイメージネーションを膨らませるかが大事ではないかなと思います。

(目黒教授)

まず自分たちが置かれている地域特性を学ぶことですけれども、防災対策を適切なものを立案し実施するには 3 つの条件が必要です。1、敵を知る。2、己を知る。3、災害イメージネーションです。

(福田市長)

やはり己を知る、周りを知るというのはとても大事なことですし、それによって備えるものというのもだいぶ変わってくるということだと思います。ですから正しく情報をまず受け止めて、それにつながる備えをする。

関東大震災の被害の状況を見ていて、丘陵地域には人があまり住んでいなかったからこの程度で済んだと。今や本当にどこの関東平野一面、どこにでも人は住んでいるし、交通インフラも含めて当時とは全く違う。だからみんなすごく移動していますし、そう考えると職場から家族のところに戻ってくるとか、あるいは戻らない決断だとかという、イメージネーションすることがものすごく多くなっていると思います。そういう意味でそれぞれの個人に合ったイメージネーションを考えておくべきだなということを改めて思わせていただきました。

(目黒教授)

よく多くの中はね、とは言っても災害なんかいつ起こるかわからないじゃないか。どんなタイミングで起こるかわからないじゃないか。だからもう考えたってしょうがないという人がいますが、これは最悪です。

今、少子高齢、人口減少です。財政的な制約も厳しい。そうしたら、従来と同じだけの

公助の割合を維持できるかを考えたら、これは絶対に無理です。今まで私たちが進めてきたアプローチの仕方っていうのは、その担い手である個人とか法人の良き心に訴える、良心に訴える防災をやっていました。こんなのはもう限界です。やっぱりこれからは、防災対策をすることで、ちゃんと得が生まれるような仕組みがある。これを作らなきゃいけない。

(福田市長)

やはり公助の限界っていうのは間違いなくあると思います。私たちの職員だって数は限られていますし、いざ発災しましたって言った時には、例えば今どうですかね、テレビで震災が起きると、なんか備蓄品がどンドンプッシュで送られてくるみたいなことが映像で流れると、なんとなく誰かがやってくれるのではないかというような思いをしている人もいます。それはそうはならないとまず思った方がいいと思います。

(目黒教授)

日本中のこういう市庁舎の建物の中で、川崎市のこの建物は、受援力の高さでいうとトップクラスです。

(福田市長)

そうですね。実はこの部屋は空間仕切られていますけども、いざ震災となったときにはその壁というのがボンと抜けて、ワンフロアがズドンと一個に抜ける形になります。

(目黒教授)

本当に緊急の中で仕事をしようと思ったら、ある言葉には対応するあるアクションがみんなて共有してなかったら、同じ言葉で違うことを想像していたら、うまいこと活動できませんよね。そういう意味でいうと災害対応もそのための練習も標準化したものが用意されてないといけない。

(福田市長)

おっしゃる通りで標準化、一つの言葉が意味していることをみんなが分かるような、こういうことだよってということがないとみんな違うことをやり始めるということじゃ本当に対応できないので大事だと思います。

(目黒教授)

有事と平時、こういうふうに分けないと。なぜならば有事っていうのは非常に時間的にもすごく限定的な現象だし、エリア全体で見ても日本全体で見ても有事である場所ってすごく少ないわけじゃない。だからこれから大切なのは平時にいかにかそれが価値を生むかと

ということです。

(福田市長)

日ごろからのお付き合い、顔の見える関係ができているところは災害にも強い。だからこれもフェーズフリーですね。平時のときか有事のときかということよりも常にそうなっていると結果的に災害に強い、バリューの高い地域になっているということだと思いません。

(目黒教授)

これから 30 年とか 50 年ぐらいの間に、首都直下地震とか南海トラフの巨大地震というのは多分高い確率で起こります。

例えばさっき言った災害イメージネーションを豊かに持っている人と持っていない人では、すごく大きな差になります。

(福田市長)

大人の皆さんにも自覚してもらいたいけども、子どもさんたちもぜひリーダーとなってもらいたいと思います。先生から将来的なことを考えると、より激甚化するだろうし、そういう時代に重なる可能性というのは極めて高いということもありましたけども、それこそいつ来るか分からないので、まず自分の命を守る、そして友達、大切な家族の命を守るために、どういう風に自分たちが行動できるかということを考えていただいて、そしていろんな人とコミュニケーションを取ってもらうということをぜひお願いしたいなと思っています。